

黄色いハンカチ

新井 宏

「まんじ」に参加してから、いつの日か『小説』を書きたいと夢見ていた。もちろん、まったくオリジナルな小説を書こうと言うのではない。感動した名作などを下敷きにして、いわゆる『翻案小説』なら書けるかも知れない。

そんな候補のひとつに、金東仁が一九三二年に書いた『赤い山―ある医者の手記―』があった。二十年ほど前に韓国語の勉強を始めた頃、繰り返し、繰り返し、テープで聴いた短編小説である。

余が広漠たる満州の朝鮮人小作人部落に滞在していた時のことである。一年ほど前から、『山猫』というあだ名の容貌怪異で、けんか早く、博打好きで、すぐ言いがかりをつけ、女に乱暴する流れ者が村に居ついていた。村人は誰もが『山猫』を追い払う相談をしたが、彼は平然としていた。追い出すのに先に立つ者が

いなかった。

だから、彼が隣村の満州国人の賭博場に行つて、なぐられ血だらけになつて帰つて来ても、みんな放つておいた。

ある日、村の宋じいさんが、ロバに年貢を積んで満州人の地主に納めに行つたが、収穫が少ないとなくぐられ、ロバに括りつけられ、送り返された時には絶命していた。村人は誰もが復讐を叫んだが、またもや先頭に立つ者がいなかった。

翌朝のことであつた。『山猫』が部落の入口で血だらけになつて死んでいるという。余が駆けつけて応急処置をほどこすと、「先生、行きました。あいつ……地主の家に」と絶え入る声でいう。余が溢れ出る涙をこらえていると「あそこに赤い山が、それから白い服が……あれ何ですか……」と。しかし、荒涼たる満州の野原がひろがっているだけだつた。

「先生、歌ってください。最後のお願い、東海と白頭の乾き減るまで…を」

余が歌いはじめると、宋じいさんの縁者や村人たちのコーラスが後に続いた。

むくげ 三千里
うるわし 山河

彼の死を弔う厳かな歌(後の韓国国歌)が次第に大きく厳肅にひびく中で、彼は冷たくなっていった。

韓国語の勉強とは言え、テープで聞かたびに、私は涙ぐんでいた。

この短編小説を何とか翻案して『まんじ』に載せたい。そう思って、もう既に十年以上になる。いつも散歩をしながら、登場人物、時代背景、地域などの構想を練るが、原作の「感動」に押しつぶされ、空々しいイメージしか浮かばない。やはりダメだ。

もうひとつ温めていたのが、わが家の次男、武の中学英語教科書に載っていた「黄色いハンカチ」である。このことは、十五年前に『まんじ』八十一号の「多率寺にて」に少し書いた。

二〇〇一年の六月六日、韓国は戦没者慰霊の休日「顕忠日」で、晋州市から三十キロほどのところにある名刹

「多率寺」まで散策に出かけた。兼農サラリーマンが休日を利用して田植に励む中、木漏れ日の小道を歩きながら、ウツを病む弟のことを考えていた。ひと回り違う弟は、大手商社に入り、美人の妻を娶り、愛らしい息子にもめぐまれ、傍目には順調そのものであったが、地位が上がると、雑事をさばけず、同僚たちから遅れはじめた。劣等感に苛まれるようになり、野球をやめ、ゴルフをやめ、友達付きあいを絶ち、ひたすら仕事と妻と子供に心を集中していったが、それがひとり相撲となり、愛する妻や子が去り、リストラの季節を迎えた。そんなことを想っている内に、やつと多率寺にたどり着いた。

そこに妻から妙子のところに初孫が生まれたとの電話が入る。あいにく、郊外で電波事情が悪く、良く聞き取れなかったが、とにかく無事に生まれたらしい。

早めに参拝を切り上げ、多率寺を下りて麓の食堂でひとまずビールで乾杯し、軽い食事をとって外にでると、心地よくふらつく。暑い日差しであった。

そういえば、妙子の生まれた日もこんな日差しであった。たまたま日曜日で長男と次男を連れて妻の実家に向いたところに、前置胎盤で異常出血があり、国立相模原病院に緊急入院したとの連絡が入っていた。

様子が全くわからない。とにかく病院に急行しなければならぬ。車よりも電車とタクシの乗り継ぎが早い

と考えて田園都市線で長津田に向った。そこまでは順調であったが、長津田駅前には一台もタクシーがいなかった。子供は駄目かも知れない。妻はどうしているだろうか。

十分、十五分、二十分。まだ来ない。もし電車が来たら隣の町田駅まで行った方が良いか。いや、もう少し待たば来るに違いない。三十分、四十分、まだ来ない。七月の初めだと言うのに、真夏の日差しであった。駅前は死んだように暑く静かであった。

やっとの思いで相模原病院にたどり着いた。受付に駆けつけると白帽の看護婦さんがこちらを振り向いた。たまたま妻の帝王切開手術を終えて、いま休憩中の看護婦さんだという。帝王切開で生まれた胎児は、酸素が欠乏して蒼白だったそうだ。危ないところだったという。美しい人であった。白い帽子が良く似合っていた。絶対にこの顔は忘れまい。

その妙子が男の子を産んだという。異常がなければそれで十分だ。いや異常があつたつて良いではないか。

私たちには武という障害を背負つた子がいる。この子が果たして、ひとりバスに乗れる日が来るであろうか。それが、初めて異常に気づいた時の想いであつた。

その武が今では、社会福祉法人の工場でお給料を買つ

て働いている。とても他人との比較にはならないが、以前の彼と比較すれば、確実に一歩ずつ進んでいる。その進歩を見つける度に、私たちふたりは喜び合ってきた。

武のお陰で、私たちはより深く人生を味わえたとも思っている。将来に不安がないかといえは、そんなことはないが、恵まれながらウツを病む弟などには、この気持が全く分らないのであろう。恵まれ過ぎていると人の心が分らず、恵まれないと人生を深く味わえる。人生とはそんなものであろうか。だから、初孫に何かあつても、妙子は強く生きて行けるはずだ。

心地よく酔つて歩き疲れたので、やつとバスに乗る気になった。田舎のバスに乗って、また思い出した。

日本語もおぼつかない武がなんとか公立の中学校に入られてもらえた時のことであつた。英語の授業が始まつていた。せめて、読み方だけでもと思い、毎朝一時間、武と一緒に英語の教科書を読み続けた。その中に「黄色いハンカチ」があつた。

刑を終えて、バスで故郷に向う男がいた。もし妻子が迎えてくれるなら、バス停の檜の木に黄色いハンカチを掲げて欲しいと手紙を送つた。

ハンカチが出ていなければ、そのまま通り過ぎる。そんな不安の中で男が見たのは、檜の木いっぱい結ばれ

た黄色いハンカチの群であった。

毎朝、同じところを読みながら、同じように感動した。そして武がはじめて普通の生徒なみの成績を得たのが英語であった。

この「黄色いハンカチ」の翻案なら、何とか書けそうである。その思いは、金東仁の『赤い山』の場合よりもはるかに強いものがあつた。

そのために、数年前、武の使っていた「中学英語教科書」をさがしてみた。

すぐ見つかるはずであつたが、まったく手ごたえがない。そもそも国会図書館に置いてない。見つかるのは「高校英語教科書」に載る「黄色いハンカチ」ばかりである。そんな馬鹿な……。

調べてみると、教科書類の保存管理は公益財団法人教科書研究センター附属教科書図書館(江東区千石)が行つていると言う。

中学英語教科書を片っ端から探すが、これが大変な作業。英語教科書の出版社がこんなに多いとは考えてもみなかった。

やはり見つかるのは高校英語教科書に載る「黄色いハンカチ」ばかりである。しかし、高校版にはかなり難しい語彙があり、内容も高度で、武と一緒に読んだ教科書

とはとても思えない。念のため、いくつかの出版社にメールで問いあわせるが、中学校版はないという。相模原市の教育関係部署に問い合わせても、二十年以上も前の教科書の記録は残っていない。

ただ、こんな調査をしている中で、「黄色いハンカチ」には、ビート・ハミルの『Going Home』という原作があることを知った。一九七一年にニューヨークポストに載ったコラムで、翌々年には、ほぼ同じ内容の歌詞を持つ「幸せの黄色いリボン」というトニー・オーランド&ドーンのパップスが全世界を席捲したという。こちらの歌の方は中学校の英語教科書に載せている出版社もある。手掛かりになりそうだ。

そうこうしている内に、思いがけないことが分かった。高倉健が「生きている限り公にしない」と言う条件で、三十年以上も刑務所の慰問を重ねていたというニュースの中に、山田洋次監督の『幸福の黄色いハンカチ』のことが出ていたのである。

一九七七年に公開されたこの『幸福の黄色いハンカチ』は同年の映画賞を総なめにし、高倉健ばかりでなく、倍賞千恵子、渥美清、武田鉄矢、桃井かおり等の俳優陣を輩出した映画だと言う。その当時はもう映画を見なくなっていたので知らなかったが、後年になってテレビで放映される『幸福の黄色いハンカチ』のことは、うつつすら

と知っていた。しかし、まさか武が中学校で勉強していた時より前に作られた映画だとは思わなかった。

関連記事を見ると、その『幸福の黄色いハンカチ』の原作がビート・ハミルの『Going Home』とあるではないか。ニューヨークポストのコラム記事をどうして山田洋次が知り、それを下敷きにして、映画を作ろうと想ったのか。小山台高校で六年ほど先輩に当たたる山田洋次の博識ぶりに改めて驚いたが、どうやら日本版のリーダーダイジェストに掲載された文を見てのことらしい。

いずれにしても、永年温めていたテーマ「黄色いハンカチ」も、かくして候補から消えてしまった。そもそも翻案で小説を書くという心がけが間違いだっただのか知らない。

せめてもの慰めは、私も山田洋次と同じく「黄色いハンカチ」の翻案を考えていたことであろうか。それで自己満足するしかあるまい。

実は、「黄色いハンカチ」をビート・ハミルの原作とするのには異論があるらしい。それは前出のトニー・オランダ&ドーンポップスが全世界を席捲した時に、ハミルが著作権を主張したが認められなかった裁判があった。

離ればなれだった愛する恋人や家族が「黄色いハンカチ」を飾って帰還を待つのは、アメリカの一般的な風習

であり、ジョン・ウエインの「黄色いリボン」などもその流れにあるのだという。それにしても、ハミルの『Going Home』の筋立てとポップスの「幸せの黄色いリボン」の歌詞の内容はそっくりで、素人目にはハミルに歩があったと思うが、被告側がハミルのコラムより前に書かれた文献を証拠として提出したため諦めたのだという。

ついでに、ビート・ハミルのことを調べて見る。高校中退の学歴でありながら、ニューヨークポストの俊敏記者・コラムニストとなり小説家としても知られ、日本で出版された著書に「ニューヨーク・スケッチブック」という短編集があるという。『Going Home』もハミルが「人間スケッチ」の一編として描いたものであるが、残念ながら「スケッチブック」には載っていない。

訳者の高見浩によると、ハミルはアイルランド系のブルックリン生まれ、酒と女とボクシングを愛し、ヴェトナム戦争の取材経験から、反戦の論陣を張りつづけ、女優のシャリー・マクレーンと同棲し、ジャクリーヌ・ケネディ・オナシスと浮き名を流すなど、米国ではなかなかの有名人だと言う。

山田洋次の映画『幸福の黄色いハンカチ』は二〇〇八年に米国でリメイクされ、人気を呼んだという。これがハミルの原作の映画化ではなく、山田洋次のシナリオを

映画化したのだと言うのが嬉しい。翻案とは言え、原作を越えた山田洋次であるから、寅さんの『男はつらいよ』シリーズを生んだのであろう。

今まで高倉健のことを任侠ヤクザ俳優くらいにしか思っていないかったが、生前の二〇一三年には「文化勲章」を貰っていると言う。同い年の山田洋次がまだ貰っていないのだから、まさに国民的な大俳優である。

山田洋次と高倉健とが組んだ映画には「はるかなる山の呼び声」もある。倍賞千恵子の他に武田鉄矢や渥美清も出演しているが、タイトルが「シェーン」の主題歌と同じなので、すぐにわかるように、これも翻案映画といえるであろう。少年ジョーイが『Shane! Come back!』と叫ぶワイオミング、イエローストーンのレストランは別れであるが、「黄色いハンカチ」の再会の感動と良く似ている。

高倉健は福岡県の高校で同級生だった元名古屋高検検事長に頼まれ、三十年前から内々に刑務所の慰問を重ねていたという。生きている限り公にしないとはこのことであった。そう言えば、高倉健には『網走番外地』シリーズという刑務所映画があった。高倉健が若い頃ボクシングに熱中していたことも、ハミルのボクシング好きと妙な形で重なる。

まあ、そんなわけで、小説などと欲張らずに、雑文でも書き続けるのが、私には似合っているのかも知れない。

注記 金東仁の「赤い山―ある医師の記録―」は、管野裕臣著「朝鮮語の入門」白水社(一九八五)に載っていた韓文とその翻訳文で、四百字つめ十枚ほどの小編。この頃から韓国語の勉強を始めていたわけで、懐かしい教科書である。